

2050年までにカーボンニュートラル(CN)実現に向けた取り組みが、政府をはじめ自治体や民間企業でも浸透しつつあります。また、SDGsの17の目標達成に向けて取り組んでいる企業やコミュニティも多くなってきました。特に省エネ住宅は新築でも改修でもCNの重要なテーマです。コロナ後の社会もオンライン活用や自然の中での生活などライフスタイルも変わり、少子高齢社会に必要な健康生活を育むコミュニティの重要性も増しています。地球温暖化に対する緩和策としての断熱による省エネと同時に、災害に強くサステイナビリティの高い適応策としての環境住宅やその集合としてのまちづくりも重要です。

この環境住宅賞では省エネ性と同時に、県の風土等の魅力を生かしたバイオクライマティックデザインを評価しています。埼玉県の市街地から自然の中まで、住宅のおかれる周辺環境、各地の歴史や風土、そして地場産材などの魅力を生かした作品が数多くありました。

# 第10回 埼玉県 環境住宅賞 作品集



埼玉県マスコット  
「コバトン&さいたまっち」



主催：埼玉県住まいづくり協議会 後援：彩の国埼玉県

## 総評

本年の環境住宅賞への応募は例年より少なかったが、作品の中身はどれも非常に濃く、次第にパッシブ環境手法に慣れてきたという傾向が読み取れた。特に、審査委員の一人は、恒常風のデータや通風などの空気の流れを設計者の感覚で適当に書くのではなく、ソフトを使ってシミュレーションしている作品が多いと喜んでいた。ソフトに頼ることを奨励するものではないが、定量的な分析によって現象を理解し、それを具体的な設計に結び付けていくことは、方法論の一つの進歩とも感じられた。パッシブ手法とは機械に頼るのではなく、その土地に立ってみて頭の上の空や太陽、空気を感じ、四季を考えてみる。さらに周辺の街並みや、緑地を見て、四季に思いを馳せ、ここに潜む暖かさや涼しさを知り、それをどのように住まいの快適さや省エネに利用できるかを考えることができるようになる。そうすると、機械仕掛けの快適さより、自然の光や、少しの空気の流れがどれほど快適さを創り出しているかを肌感覚で感じられるようになる。これは設計の醍醐味だ。地面の暖かさも普通ではわからないが、太陽の熱が地表面に蓄熱され地中熱を利用することも可能だ。また、換気についても部屋から外気に捨てていた排気の温度を新鮮空気に熱交換ができるいかを考えるのも大事だ。しかも機械を使わずに。していくと、一つ一つの設計の中に、自らが感じ、考えた方法で良い環境を生み出していくという設計の喜びも感じことだろう。必ずしもソフトを駆使する必要はないが、それを使いこなしていくと、そこに示されている数値が環境性能の意味ある数値となってくる。そういう体験をしてほしいと思わせる今回の審査だった。

(中村 勉 委員長)



## 第10回埼玉県環境住宅賞の流れ

### 審査委員会

令和5年4月21日

募集集 令和5年6月1日～9月22日

応募作品	34作品
・建築部門	13作品
・アイディア部門	14作品
・学生部門	7作品

### 審査委員会

令和5年10月6日(作品審査)

### 表彰式

令和5年12月22日

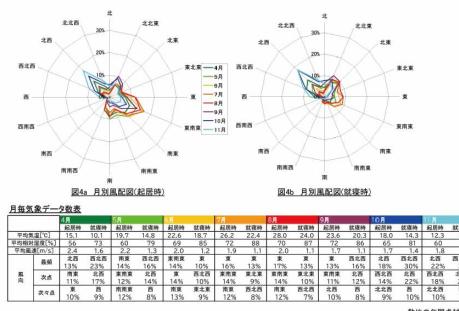
## 目次



審査委員長総評	1p
目次	1p
埼玉県知事賞	2p
優秀賞	3～5p
審査委員長特別賞	6p
協議会会長特別賞	7p
入選	8～11p
奨励賞	12～15p
応募作品	16～18p

## 埼玉県知事賞 (建築部門)

# すばこ～女性と犬の終の棲家



所 在 地	本庄市
構造・階数	木造 1階
敷地面積	193.65m <sup>2</sup>
延床面積	92.75m <sup>2</sup>
建築面積	101.17m <sup>2</sup>
工事費	約2,670万円
居住者構成	15歳以上65歳未満1人 合計1人+犬1匹
応募者	河原 泰(株式会社 河原泰建築研究室)
設計者	株式会社 河原泰建築研究室
施工者	横尾建設 株式会社

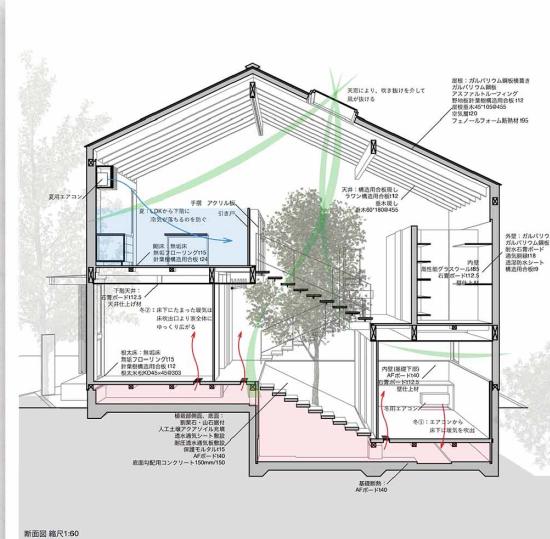
## 講評

この場所に生まれた時から住みつづけ、高齢になって犬と一緒に終の棲家にしたいとの希望を美しい木の繁柱の空間でつくりあげた美しいすばこである。設計者が、住まい手の犬への愛情と毎日の少しの動きや視線などをよく理解し、単純な空間構成に行きついたことに感動した。敷地の隅々まで人も犬も、室外も室内と同様に、その時の気持ちと空気とが結びついて広く生活でき、また空間に守られている安心感がある。本庄市の気候風土をよく理解し、冬暖かく、夏涼しく、安心して暮らせて、近隣の視線から守られて、かつ地域が明るくなる家と説明文にあるとおりだ。木板の3つのレイヤーが空間に襞を与え、視線の誘導や隙間の花を愛でるゆとりも生まれている。建築的に小口の処理やこの木柱の美しさがどのように年月とともに変化していくかに多少の心配はあるが、それもこの女性と犬の生涯と一緒に朽ち果てていくのかもしれない。そう思わせる秀作である。

(講評：中村 勉 委員長)

# 優秀賞 (建築部門)

## brachium



断面図 鋏尺1:60  
住宅地の南側に新規に開いた敷地での新築計画です。  
敷地は両辺に既存戸があり、北東、北西方向で接道し、南東側は雑木がかなり近寄っている土地になっていました。  
施主はアパートアーバンなあまり知らない方の新築者として、隣家の音や外の匂いを遮るなどして、屋外で食事を楽しめる住宅を望んでいらっしゃいました。  
ただ同時に、これららの方に購入する新築者として、隣家の音や外の匂いを遮るなどして、屋外で食事を楽しめるという配慮もいました。  
追加でアレンジを行った結果、好んで窓やドアを開け置く方にとっても良いかもしれません。

一部の階層をスキップして、廊下を設けて、各部屋をつなぎ、これだけでドアの開け閉めだけでつながりやすくなっています。

この家の特徴ある点は、外壁に植栽を入れる方法の二つが挙げられます。

この家の特徴ある点は、外壁に植栽を入れる方法の二つが挙げられます。

ここが中に入ってきたら、中央に吹抜けを設け、南北四面にスキップフロアとなる構成がつくれた。

室内吹抜け部分の移動を経験する住む住むことがわかります。

小屋形状の吹抜けは移動で一体感を感じる構造で、水平に目線が抜け戻す必要がない平面方向の広さを獲得し、

スキップフロアであることで上下方向に視線が貫通しながら、屋内がひとつの空気環境となるように検討した立体的断面構成の住宅となっています。



所在地	さいたま市
構造・階数	木造 2階
敷地面積	127.73m <sup>2</sup>
延床面積	109.48m <sup>2</sup>
建築面積	70.73m <sup>2</sup>
居住者構成	15歳未満1人、15歳以上65歳未満2人 合計3人
応募者	長澤 徹(ポーラスター・デザイン一級建築士事務所)
設計者	ポーラスター・デザイン一級建築士事務所 長澤 徹
施工者	芦葉工藝舎

### 講評

厳しい敷地条件に果敢に挑戦し、明快な答えを導き出した素晴らしい作品に称賛を送ります。この作品の称賛に値するポイントは、3つに絞られます。

1つ目は、環境住宅賞の主なるアプローチの温熱環境に対し、自然採光や通風などを巧みに取り入れ、温熱環境とのバランスを整えたことです。

2つ目は、樹木という自然素材を中庭に取り入れ、季節の変化を感じる生活として融合させたことです。

そして、3つ目は、樹木の枝葉のようにスキップフロアを配置し、緩やかで楽しさを感じる生活演出したことです。

この3つの提案が重なり合うことで、『住むことは心地よい』という答えが導き出されています。

また、都市から緑が失われ、子供達の危険がさやかれる外部環境においても一つの解決方法として評価されるべき作品であると感じます。

(講評: 廣瀬正美 委員)

# 優秀賞

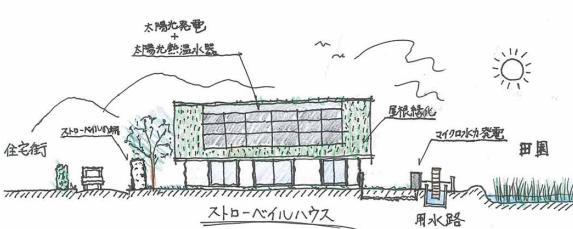
(アイディア部門)

## 『地球に還る家で地域おこし』 ～埼玉県の気候風土を活かしたLCCM住宅～

### 『 地球に還る家で地域おこし 』

～埼玉県の気候風土を活かしたLCCM住宅～

※LCCM住宅（ライフサイクルカーボンマイナス住宅）とは、長寿命で且つ一層のCO<sub>2</sub>削減を目指とし、住宅の建設時、運用（居住）時、廃棄までの一生涯、つまり住宅のライフサイクルトータルでCO<sub>2</sub>の収支をマイナスにする住宅のことです。



#### ■埼玉県の特色を活かしたSDGs構想

埼玉県の地域の特色や、気候風土を最大限に活用した、真のLCCM住宅の構想です。

埼玉県は東京都心からの距離も近く、リモートワークとオフィス通勤を上手く使い分けられるエリアです。

また、埼玉県は住宅街・田んぼや畑などの農業のエリアが近接している、水辺が多く存在しています。

そんなエリアの特色を活かし、農地から発生する藁を活用したストローベイルハウスで、地産地消のサステナブルな家づくりと、太陽光発電×太陽熱温水器のハイブリッドや、マイクロ水力発電、ミスト冷房装置など、自然素材とハイテク技術を組み合わせたLCCM住宅を提案いたします。

埼玉県ならではの、「自然と共存できるスローライフな暮らし」の町並みで、地域おこしを行う計画まで構想してみました。

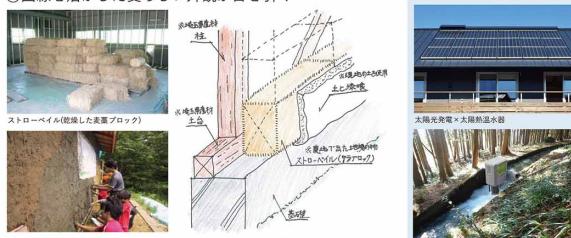


#### ■地産地消のストローベイルハウス(藁の家)

ストローベイルハウスとは藁（ストロー）を45cm程の厚みに圧縮したブロック（ベイユ）を積み重ね、土と漆喰で塗って仕上げた究極のエコロジーハウスです。解体すると土に還り、産業廃棄物をほとんど出さない。

「地球に還る家」で、建設時のCO<sub>2</sub>発生を大幅に削減します。

- ①構造躯体は埼玉県産木材を使用した地産地消
- ②大気汚染となる野焼きを防止し、廃棄藁を活用
- ③厚い藁の壁は、断熱性が高く、防音と調湿効果が高い
- ④曲線を活かした愛らしい外観が目を引く



#### ■太陽光と水流を活用した発電システム

年間日射量が多い埼玉県の気候を活かし、太陽の恵みを最大限に活用する。太陽光発電パネルは、高温時に発電量が低下してしまいます。

そこで、太陽熱温水器と組み合わせることで、太陽光発電パネルの温度を下げながら、集熱した熱を温水床暖房や給湯として利用することができます。

また、農地エリアを流れる用水路や河川を利用し、小水量でも発電できる、マイクロ水力発電を行います。水の流れを活用することで、夜間の電力も確保し、CO<sub>2</sub>の収支をマイナスになります。



#### ■地域おこしとしての町づくり構想

ストローベイルハウスのフォトジェニックな外観を活かした街並みで新たな観光名所を作る。

川越市のお伊沼付近に設定することで、蔵造りの街並みから新たな観光エリアとして繋ぐことができます。

外国人観光客のインバウンドを享受し、子育て世代が親子で楽しめる、都心近郊の観光地モデルとなります。

##### ①ストローベイルの小商い建築群

- ・フォトジェニックな空間を楽しむ
- ・藁の家でスローライフな宿泊
- ・LCCMタウンのモデルケース

##### ②埼玉県の伝統工芸体験

- ・小川和紙で照明づくり体験

##### ③越ヶ谷だるまアート製作

- ・川口竹釣竿づくりとヘラブナ釣り体験

##### ④グリーンツーリズム

- ・藁の船を造って伊沼を漕ごう！
- ・光で埋めよう！伊沼灯ろう流し
- ・農業体験（親子で稻作、農園づくり）
- ・バードウォッチング、水辺生物観察

構造・階数 木造 ストローベイルハウス 2階

居住者構成 15歳未満 2人、15歳以上65歳未満 2人

合計 4人

応募者 永島 利倫(近藤建設 株式会社)



### 講評

地域の状況、環境も考慮しつつ、住宅の性能について様々なアイディアが盛り込まれた作品です。東京都に隣接しながらも、ローカルな面もあるこの地域の気候風土を最大限利用し、農地の藁の活用や地産地消、太陽光発電やマイクロ水力発電など様々な工夫が凝らされており、その組み合わせが目を引きます。

新たな街並みの創造による観光拠点の整備、インバウンドを享受しながら子育て世代も楽しめるモデルを目指し、埼玉県内に残された伝統工芸の体験やグリーンツーリズムなど、自然と共に存できる住宅とこれからの地域おこしも踏まえた計画で、スローライフへの期待が広がるアイディア賞にふさわしい作品です。

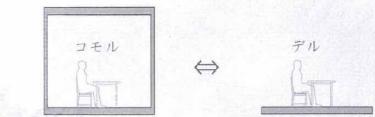
(講評：丸岡庸一郎 委員)

Toshiyuki Nagashima

# “ハナレ”の家



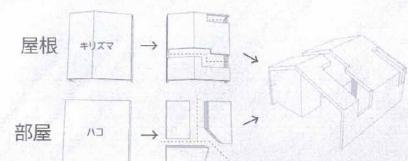
③ 居場所による変化



コモルやデル、トジルやヒラクの対局する空間、行為で3つのハコと庭により誘発する。4つの空間は勉強、仕事、娛樂など日常の連鎖を適地で行うことができる。

また季節、時間により自分の心地いい空間を選べる。

④ ダイアグラム



① 蔵を文化としたまち

忍城の城下町行田の裏通りを歩くと、時折ミシンの音が響き、土蔵、石蔵、モルタル蔵など多彩な足袋の倉庫「足袋蔵」が姿を現す。行田足袋の始まりは約300年前。武士の妻たちの内職であった行田足袋は、やがて名産品として広く知れ渡り、最盛期には全国の約8割の足袋を生産するまでに発展した。それと共に明治時代後半から足袋蔵が次々と建てられていった。

行田市にある蔵は現在、倉庫や店舗、展示場等幅広く使われており、蔵を“ハナレ”的に使うことは珍しくない。

ハナレは人に外に誘導し、まったく違った生活空間を同敷地内で体験できるメリットがある。

蔵文化を現在に継承する手段として“ハナレ”的な住宅を設計する。

3つのハコは空間の広さ、場所の違いを出すことでより心理的に多様な住宅にさせる。

② 3つのハコを持つ家

行田市にある蔵は現在、倉庫や店舗、展示場等幅広く使われており、蔵を“ハナレ”的に使うことは珍しくない。ハナレは人に外に誘導し、まったく違った生活空間を同敷地内で体験できるメリットがある。

蔵文化を現在に継承する手段として“ハナレ”的な住宅を設計する。

3つのハコは空間の広さ、場所の違いを出すことでより心理的に多様な住宅にさせる。



④ 1階平面図



屋根とスラブの隙間  
から見える空

⑤ 2階平面図



空、緑、街を  
一望するデッキ



## 講評

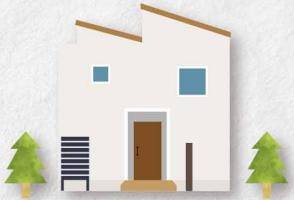
一見すると屋内に見える空間を外とする（半外）提案が面白く、各部屋をハナレとしてメリハリのある生活ができる提案を評価した。また、それらをつなぐスペースや、1階アプローチの外壁をセットバックさせた所に、ふんだんに植栽を配置していることが、環境共生を醸し出している。ただ、省エネ性や快適性に大きな影響を与える太陽の光・熱をどのようにするのかが見えなかったことが残念である（審査では図面右側を南として見た）。太陽光を取り入れるのか、遮るのか、また通風はどうするかなど、省エネにするための工夫を示せるようになると、一層良い提案になると思われる。

(講評：松岡大介 委員)

審査員長特別賞 (アイディア部門)

# 「目が不自由」だからこそ楽しい自然あふれる家

構造・階数	木造 1階
延床面積	115.7m <sup>2</sup>
居住者構成	65歳以上 1人
応募者	栗屋 采代(株式会社 AQ Group)

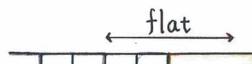


## 「目が不自由」だからこそ楽しい自然あふれる家

### POINT 1

#### ~フラットな上がり框~

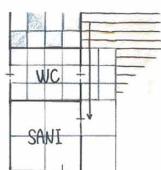
上がり框をなくして段差をなくすことで、玄関での転倒を未然に防ぐことができます。また、目が不自由な人にとってもスムーズに住まいへ入ることができます。



### POINT 2

#### ~足で感じる場所~

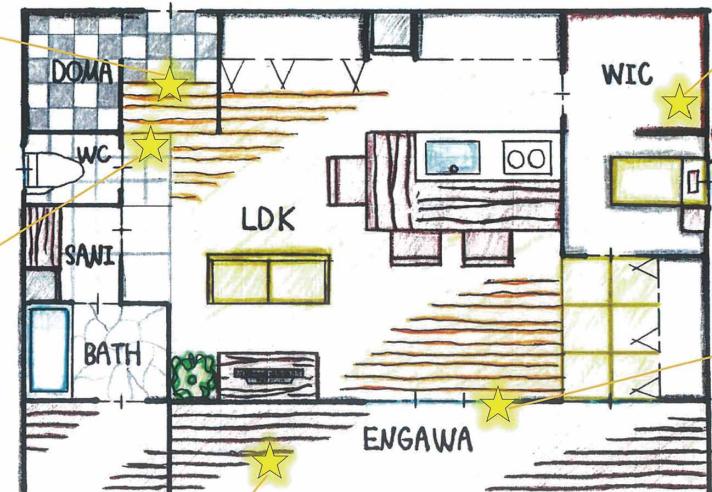
目の不自由な方は特に、視覚以外の感覚が優れています。LDK、トイレ、洗面所、和室の床材の種類をすべて違うものにすることで、今いる場所を簡単に把握することができます。さらに、トイレと洗面所の床材を延長させることで、目的の場所にたどりやすくなります。



### POINT 3

#### ~くつろぎの場 縁側~

南側には、縁側をたっぷり取り入れました。庭にたくさんの木を植えることで季節の変化を楽しむことができます。目が不自由でも見えなくとも、耳をすませば心地よい風の音や鳥のなき声が聞こえます。息を吸えば自然の香りやお隣さんのおいしいご飯においてきます。縁側に手をつければ、心地よい無垢材の感触を楽しむことができます。日中、植物はたっぷりの日差しを浴びることができます。そして光合成によって二酸化炭素を取り込み、たくさんの酸素を放出してくれます。さらに、ちょっとした木陰もつくってくれるので夏の暑さ対策にもなります。



### POINT 5

#### ~埼玉県の間伐材の壁~

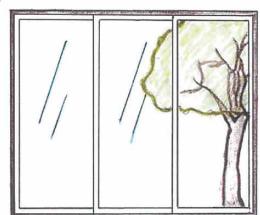
埼玉県で育った木の間伐材を壁に張り合わせました。木の香りが強くする方向に歩けば、毎日使用するクローゼットにたどり着けます。



### POINT 4

#### ~大開口の窓~

大開口の窓は、LDKにたっぷりな明るさをもたらしてくれます。そのため、目が不自由でも「朝→昼→夜」や「春→夏→秋→冬」といった時間や時期の変化を存分に楽しむことができます。



## 講評

「目が不自由だからこそ楽しい自然あふれる家」というタイトルに魅せられ、目が不自由な住まい手が、楽しく家の中を伝いながら歩き回り、楽しい人生を送っている様子がこの一枚のプランの中に見えてくる。あまり広すぎない空間をと考え、どこでも手が届く位置に欲しいものがあり、手が触れる感触が気持ちよい感触をもたらす、平和な住まいを想像させる家だ。そう見ていくと縦の細い木柱がいくつか欲しいと思うところがあり、住みやすさはどうしたらよいかを考えていくと、もっと良いアイデアが生まれてくるとも感じられる。目の不自由な人の動き、何を頼りにしたいのか、何に触ると嬉しいか、人の触感と幸せな気持ちをどうしたら空間に表現できるかを考えてさらに良い環境を作りたいと思う。

(講評: 中村 勉 委員長)

## 協議会会長特別賞

(学生部門)

# 故事來歴 光と風の住まい

## 故事來歴 光と風の住まい



1.自然素材の利用・循環循環の長寿命化と工夫  
・自然素材住宅: 前から切り出された木材を利用しないでいる住まい、木橋  
・長寿命住宅・再生豪屋として古なところを改修していく。資源リサイクル循環して改修時に交換した木材を家具具にし  
資源物を削減する。

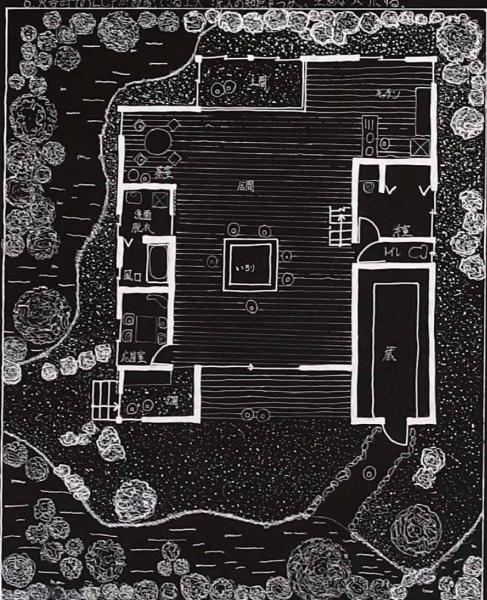
2.省エネ設計と使う工夫  
・省エネアドバイス住宅: 敷屋根を用いた重力換気。土壁を用いることにより、暖房費を大幅に削減でき、最小エネルギーで快適な生活ができるようす。  
・ライクサイクルのCO<sub>2</sub>排出を削減住宅: 冬は縁側や越屋根から太陽光が差し込むように設計し、暖房の利用を抑える。夏は日光を遮断し暖房の利用を抑える。

3.自然と共に共生し、自然風など自然力を利用し貢献する工夫  
・自然環境調和型アース住宅: 園内の森や植栽とブリーチークを形成。外観側が主軸自然通風住宅: 土間や縁側へ遮蔽施設がないことで風が通りやすくなる。  
・微気候用住宅: 地下室、集合住宅、土間や縁側を用いて地域、季節、季節の形成に役立てる。  
・冬は谷から山へ、夏は山から谷へ、冬は山谷風を利用して風をもたらす。夏は斜面で傾けた太陽光はひさや敷屋根でカットし、室内温湿度上昇を防ぎ、冬は約30°で降り注ぐ太陽光は、入りのすぐまで入る。内蔵もあたまるなどで涼みとなる。

4.地風の熱風、気流風土・歴史的技術の継承などへの工夫  
・気候風土告白住宅: 明屋として歴史的な技術を継承する。床の間(障子)をなくして壁面で仕切る。木材地盤地消住宅: 枝材を用いた壁面地消し、林業、製材業へ貢献した住宅である。

5.少子高齢化社会に向かって省エネ環境の工夫  
・家の丸い、共同の住まいの提案: 伝統をもつてから全てをフルフラットにする。新規少子高齢化社会を楽しむコトの提案: 園内の森や植栽を複数的に楽しめる空間づくり。

6.災害時のICPの実験による工夫  
・災害の知識をつける。



その他、創造的な工夫  
・骨組とする部分をつなぐキットワーク  
・公園に小さな窓を開け、家族みんなで外で遊ぶことができる  
・木の再利用と互換性、資源循環で人を楽しむ  
・季節を感じられる植物配置  
・地元農場の野菜栽培地を活用する  
・虎野町の特産品を活用する  
・虎野町の特産品を活用する



所在地 秩父郡小鹿野町

構造・階数 木造 2階

敷地面積 425.5m<sup>2</sup>

延床面積 235.5m<sup>2</sup>

建築面積 174m<sup>2</sup>

居住者構成 15歳以上65歳未満 3人

応募者 山下 永遠(埼玉県立熊谷工業高等学校)

## 講評

「光と風の住まい」と称されるこの住宅は、自然素材の活用や通風、省エネに焦点を当てながら、快適な生活を実現するために工夫されています。家の中心に囲炉裏を配置するアイデアにより、家族が自然と集まり、土間や縁側など、伝統的な間取り要素を取り入れることで、親しみやすく、友人や近隣住民との交流が活発になるでしょう。自然との調和を図りながら、機能的で風通しの良い環境を提供するために、さまざまな設計と工夫が随所に見受けられます。この住宅は自然に恵まれた地域における再利用と木材の循環を奨励し、地元の建材を活用する地産地消の取り組みが印象的です。環境への配慮が素晴らしいと賞賛に値する取り組みです。

(講評: 宇佐見佳之 会長)

## 入選

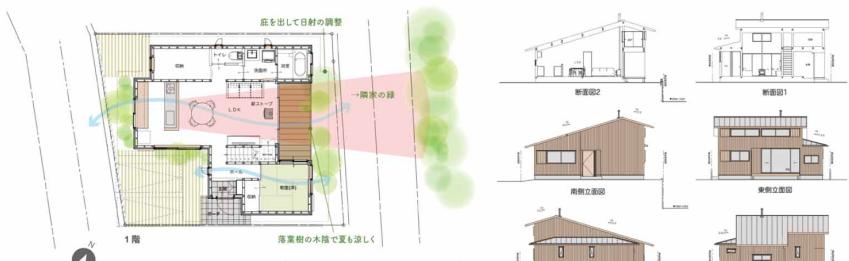
(建築部門)

# 見沼の家



景色のよい東に開く

建設地はさいたま市見沼区、程よく高台になっている敷地となります。南側には背の高い住宅があり採光は望めませんでした。しかし、東側は隣家の木造が程よく茂っており、2階に上がり遠くの見沼田んぼまで見渡せます。そのため東側を開き、緑をつなげ解放感ある空間をつくることを狙いました。外壁の南京下見板やウッドデッキ、板張りのフェンスなどクライアントご夫妻が施工しました。お二人にとって良い思い出となってくれたようです。



### パッシブデザインと エアコン1台で快適に暮らす

高断熱・高気密住宅であることにより、パッシブデザインを取り入れることで、大きな機械に頼らないもん jednocześnie1台で家中の冷暖房をえる想定です。

住宅性能表示 / 1-2耐震等級：3 / 耐風等級：2 / 地化ガス等級（構造躯体等）：3 / 植生管理方策等級（専用配管）：3 / 断熱等性能等級：5（地域の区分：6）/ 全居室の平均日射熱取扱率：1.3

U値：0.47W/(m<sup>2</sup>·K) C値：0.2cm/m

設計一次エネルギー消費量：772MJ/m<sup>2</sup>·年



完全分離型熱

国産材使用

令和4年度地域型住宅グリーン化事業採択物件



所在地	さいたま市
構造・階数	木造 2階
敷地面積	132.81m <sup>2</sup>
延床面積	89.85m <sup>2</sup>
建築面積	71.66m <sup>2</sup>
工事費	約3,500万円
居住者構成	15歳以上65歳未満 2人
応募者	藤岡 正洋(こなから建築工房 株式会社)
設計者	こなから建築設計室 藤岡 正洋
施工者	こなから建築工房 株式会社

## 講評

最新の建築技術（高断熱やパッシブデザイン）を駆使した省エネ化と再生可能エネルギーの導入により、脱炭素な住まいを実現しています。技術だけを追求した家は無機質に感じられますが、周囲の地形的な課題を克服し緑を多く取り入れ、風を活用する等ハートフルで豊かな暮らしがうかがえます。ゆっくりと時間が流れしていくようです。さらに、木材を意識的に取り入れることで周囲の景観とも調和しすべてに環境配慮が感じられる作品です。

(講評：秋元智子 委員)

## 入選 (建築部門)

# ～風をあつめる家～



所 在 地	秩父郡皆野町
構造・階数	木造 2階
敷地面積	468.51m <sup>2</sup>
延床面積	129.17m <sup>2</sup>
建築面積	86.95m <sup>2</sup>
工 事 費	約3,300万円
居住者構成	15歳未満 3人、15歳以上65歳未満 2人 合計 5人
応 募 者	株式会社 小林建設
設 計 者	株式会社 小林建設一級建築設計事務所
施 工 者	株式会社 小林建設

講評

通風に関しては、気象データの風配図だけでなく周辺の状況も良く読み込み、シミュレーションツールを使って通風量を確認していることに加え、照度も計算してランマなどの配置に活かしており、それらの緻密な設計を高く評価した。また、太陽光発電だけでなく太陽熱給湯併用やエアコン排熱利用の設備の導入も評価したポイントである。省エネ性や快適性の観点では最高の住宅だと思われるが、もっと外観に現れる工夫が欲しかった。

(講評: 松岡大介 委員)